# イザヤ書36-39章と列王記下18:13-20:19、どちらが先か？

Which was first, Isaiah 36-39 or 2 Kings 18:13-20:19?

越 後 屋　朗
Akira Echigoya

**キー・ワード**

**イザヤ書 36-39 章、列王記下 18:13-20:19、伝承史、編集史**

KEY WORDS

Isaiah 36-39, 2 Kings 18:13-20:19, tradition history, redaction history

**要旨**

**イザヤ書 36-39 章と列王記下 18:13-20:19 に「ヒゼキヤ－イザヤ物語」と呼ばれる、ほぼ同じテキストが出てくる。これら二つのテキストの関係について、少なくとも次の三つの説明が可能である。(1) イザヤ書の編集者が列王記から写した。(2) 列王記の編集者がイザヤ書から写した。(3) 両編集者が同じ資料から写した。研究者の多くは、イザヤ書 36-39 章が列王記下 18:13-20:19 から取られたと考えるが、中にはこれを受け入れず、列王記の方がイザヤ書から取られたと主張する者がいる。本論はこの論争を検討し、最終的には、「ヒゼキヤ－イザヤ物語」に見られる申命記史家による編集上の表現に注目することにより、列王記の方がイザヤ書よりも先であると結論づける。**

SUMMARY

Isaiah 36-39, the so-called “Hezekiah-Isaiah narratives,” are almost identical with 2 Kings 18:13-20:19. With regard to the relationship between them, we can assume at least the following three possible explanations: (1) the compiler of Isaiah copied them from Kings; (2) the compiler of Kings copied them from Isaiah; and (3) both copied them from a common source. It has been widely accepted that Isaiah 36-39 were borrowed from 2 Kings

18:13-20:19, but some scholars have abandoned this conclusion and suggested that Kings borrowed from Isaiah. This paper briefly reexamines the scholarly debate on the relationship between Isaiah 36-39 and 2 Kings 18:13-20:19. Finally, by paying attention to the Deuteronomistic redactional expressions in the “Hezekiah-Isaiah narratives,” it is concluded that Isaiah is dependent upon Kings.

## Ⅰ．序

イザヤ書36-39章は物語の形態を取り、その前後にある35章と40章から区別される。その36-39章は内容の上で36-37章、38章、39章に分かれる。36-37章はアッシリアの王センナケリブによるエルサレムの攻撃とそれからの解放、38章はユダの王ヒゼキヤの病気と回復、39章はバビロンからの使者のエルサレム来訪を扱う。[1] 38章はその6節（「アッシリアの王の手からあなたとこの都を救い出す。わたしはこの都を守り抜く。」）によって36-37章と関連し、38章と39章はヒゼキヤ王の病気と回復ということでつながっている。従って、36-39章は文体と内容の点からひとつのまとまりをなしているとみなすことができる。

このイザヤ書36-39章とほぼ同じテキストが列王記下18:13-20:19に出てくる。ただし大きな違いとして、イザヤ書38:9-20に並行する部分が列王記にはなく、反対に列王記下18:14-16に並行する部分がイザヤ書にはない。その他の部分は細かな違いがいろいろとあるものの、だいたい並行している。

ここで問題となるのは、イザヤ書36-39章と列王記下18:13-20:19との関係である。これら二つのテキストは一体どのようにして作り出されたのか。その成立過程に関して、少なくとも次の三つの可能性を想定することができる。

(1) イザヤ書の編集者が列王記から写した。
(2) 列王記の編集者がイザヤ書から写した。
(3) 両編集者が同じ資料から写した。[2]

一般的にはイザヤ書の編集者が列王記から写した（つまり、最初は申命記史書、すなわち列王記の一部として組み立てられた）と考えられてきた。例えば、O.Kaiser（1976年）は次のように述べている。

> 36章以下の伝承が全体として、ほとんど言葉を違えずに列王紀（ママ）下18章13節、17節から20章19節までに見出されるので（歴下32章1、9-26節参照）、イザヤ書と列王紀のうちどちらの伝承がもとから伝えられていたのかの問いに決定を下す必要に迫られる。列王紀下18章13節（並行記事＝イザ36章１節）は、イザヤ書には伝承されていない列王紀下18章13-16節の年代紀断片の一部であることが明らかなので、優先権問題は列王紀に有利な決着がはっきりとつけられる。[3]

Kaiser は列王記下18:13（イザヤ書36:1）と列王記下18:14-17（イザヤ書には並行記事がない）との関係から、イザヤ書の編集者が列王記から写したと主張する。木田献一氏（1994年）も「内容と文脈からして、列王記の方が本来のものと考えられる」としている。[4]

しかし最近になって、こうした考えとは異なり、列王記の編集者がイザヤ書から写した（つまり、最初はイザヤ書の一部として組み立てられた）、あるいはある資料からイザヤ書と列王記に別々に写されたという主張が出てきた。W.A.M.Beuken（2000年）によれば、

> …多くの注解者たちは、それらの章（イザヤ書36-39章［著者注］）が列王記下18:13-20:19から取られたとする古くからの仮説を捨てる傾向にある。現在、研究者たちはそれらの章がイザヤ書の最終形態を考慮して編み出されたか、あるいは長い編集過程の中で適合された、古くからあった別々のテキストであったとみなしている。[5]

さらに、フランシスコ会聖書研究所による注解書（2000年）には次のように記されている。

> イザヤ書36-39章と列王記下の並行箇所との関係については、イザヤ書が列王記のテキストに基づいている、というのが通説であった。しかし最近、その逆を正しいとする説が強くなっている。第三の説は、イザヤ書、列王記双方が現存しない共通の記事に基づいており、恐らく…三部分（イザヤ書36-37、38、39章［著者注］）それぞれに関する三つの記事があったろうと考える。[6]

この小論では、イザヤ書36-39章に関する最近の研究に基づいて、列王記の編集者がイザヤ書から写したとする主張の根拠を紹介し（第III章）、続いてそれがこれまでの通説に取って代わることができるのかを検討する（第IV章）。列王記よりイザヤ書を先とする主張を紹介する前に、これまでの通説の根拠に簡単にふれておきたい（第II章）。

## II．列王記からイザヤ書へ

イザヤ書36-39章が列王記から取られたものであると最初に主張したのはF.H.W. Gesenius（1821年）である。彼の主張の根拠は次の三点である。[7]

（1）エレミヤ書を締めくくる最終章（52章）が列王記下24:18-25:30から取られたのと同じく、イザヤ書36-39章もイザヤの預言（第一イザヤ書）を締めくくるために列王記下18:13-20:19から写し取られた。[8]

（2）列王記下18:13-20:19とイザヤ書36-39章の比較から、イザヤ書の方が二次的であると考えられる。つまり、列王記からイザヤ書に写された際に、テキストは手が加えられ（書き込みや省略など）、より読みやすいものとなっている。[9]

（3）「ヒゼキヤ－イザヤ物語」（列王記下18:13-20:19//イザヤ書36-39章）は列王記の文体（散文）と神学的内容にうまく適合している。[10]

このGeseniusの主張は彼以後の研究者達に大きな影響を及ぼしてきた。

さらに、ここではB.Stadeの研究（1886年）も紹介しておくべきだろう。彼は列王記下18:13-19:37を18:14-16（A資料）と18:13, 17-19:37（B資料）に分け、前者を紀元前701年のエルサレム包囲を伝えるアッシリア王センナケリブの角柱（プリズム碑文）の内容との一致から、現在の場所には後になって挿入されたが、歴史的に正確な古い資料とみなした。[11] この主張はそれ以後、イザヤ書36-39章と列王記下18:13-20:19との関係を考える際、研究者の関心を主に列王記に向けさせることになった。[12] 列王記下18:14-16が歴史的に正確で古い資料となると、それとはまったく対照的で伝説的な（神学的な）内容の18:13, 17-19:37は後代のものとなる。このことは18:13, 17-19:37にそれよりも古い資料である18:14-16が後になって挿入されたのではなく、本来18:14-16が先にあって、後に18:17-19:37が付け加えられたという主張を生み出すことになった。さらに、18:14-16だけではそれ自体の中に導入部にあたる部分がないことから、18:13が18:14-16の導入部としてみなされ、18:13-14に18:17-19:37が付加された、となった。[13] この主張からイザヤ書36-39章と列王記下18:13-20:19との関係を考えると、前者は後者から取られたということになる。すでに紹介したKaiserの主張の根拠も列王記下18:13-16をひとつのまとまりとみなすところにあった。

## III．イザヤ書から列王記へ（通説への反論）

通説とはまったく反対の、列王記の編集者が「ヒゼキヤ－イザヤ物語」をイザヤ書から取ったとする説を最初に体系的に主張したのはK.A.D.Smelik（1985年）である。[14] 彼の主張の根拠をまとめると次のようになる。[15]

（1）イザヤ書36-39章はエレミヤ書52章のような、1-35章への単なる付加ではなく、1-35章と40章以下を編集上橋渡しする機能を持っている。[16] これは先に述べたGeseniusの根拠（1）への反論となる。

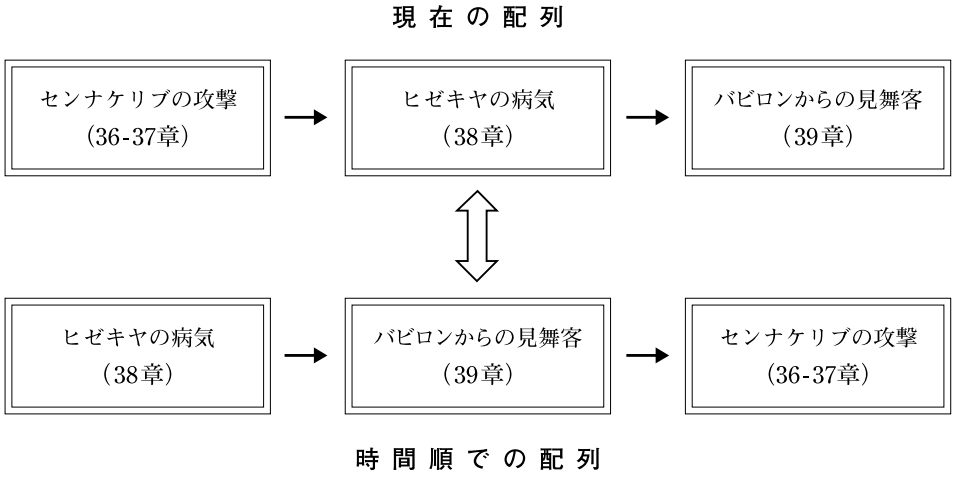
（2）ヒゼキヤの病気の箇所に関して、イザヤ書38章の方が列王記下20:1-11よりもうまく組み立てられており、展開がスムーズである。列王記では、ヒゼキヤが回復した（7節）後に、「しるし」を求めており（8節）、筋が通らない。[17] また、イザヤ書にはセンナケリブへのヒゼキヤの降伏（列王記下18:14-16）に並行する部分がないので、全体としてイザヤ書の方がまとまっている。[18] これはGeseniusの根拠（2）への反論と言えるかもしれない。

（3）列王記下38:17-20:19は列王記のコンテキストに適合していない。後期預言書の中に記録されている預言者で、列王記に出てくるのは、唯一この箇所におけるイザヤだけである。エレミヤ書の最終章に引用された列王記下24:18-25:30にさえエレミヤの名前は出てこない。[19] さらに、「ヒゼキヤ－イザヤ物語」の一部分は詩であり、この文体は列王記に合わない。加えて、イザヤ書には「ヒゼキヤ－イザヤ物語」の箇所以外にも散文はある。[20] これはGeseniusの根拠（3）への反論となる。

（4）イザヤ書36-39章と先行する1-35章との間には並行する箇所がある。特に7章との並行関係は重要であり、エルサレム包囲という危機に直面した二人の王、ヒゼキヤ（イザヤ書36-37章）と彼の父アハズ（7章）がはっきりと対比されている。列王記には7章と並行する箇所がないことから、7章と対をなす36-39章も、元来はイザヤ書のために組み立てられたものである。[21]

（5）イザヤ書38:6 // 列王記下20:6にある、ヒゼキヤとエルサレムをアッシリアの王の手から救い出すというヤハウエの約束はすでにその前の章の終わりで実現されていることから、現在のテキストの配列を時間順に並び替えると、ヒゼキヤの病気の部分（イザヤ書38章 // 列王記下20:1-11）はセンナケリブの攻撃（エルサレム解放）の部分（イザヤ書36-37章 // 列王記下18:17-19:37）の前に来るはずである。バビロンからの見舞客の部分（イザヤ書39章 // 列王記下20:12-19）は内容の上でヒゼキヤの病気の部分と密接に関係しているので、その部分の後、そしてセンナケリブの攻撃の前に位置する。すなわち、ヒゼキヤの病気、バビロンからの見舞客、センナケリブの攻撃という順になるはずである。それでは、なぜ現在の配列となったのか。それはイザヤ書40章以下との関係から説明することができる。バビロンからの見舞客の部分（イザヤ書39章）はバビロン捕囚を暗示しており、

続く40章以下への導入部となっているからである。「ヒゼキヤ―イザヤ物語」の現在の配列はイザヤ書40章以下を念頭に置いてなされたものと考えられる。[22]




さらにSmelikの主張を推し進め、より説得力ある仕方で議論を展開したのがC.R. Seitz（1991年）である。[23] 彼はイザヤ書に並行する箇所がない列王記下18:14-16を、Stadeと同じく、後代の挿入であると考える。その根拠として、18:14-16が13節から17節へと続く物語の展開を中断していることと、18:14-16の存在が17節以下では前提とされていないことを挙げる。[24] さらに、Seitzは18:14-16とアハズの降伏を物語る16:5-9との類似点を指摘し、これら2つのテキストは同じ人物によって組み立てられたか、あるいは前者は後者をモデルに作られたと主張する。[25] Seitzによれば、アッシリアへの降伏というヒゼキヤにとってマイナスのイメージとなる18:14-16が挿入されたのは、ヒゼキヤの治世の後もアッシリアの脅威が続いたということを説明するためであり、さらにヨシヤをヒゼキヤよりも素晴らしい王として描くためである（列王記下18:5と23:25参照）。[26]

また、Seitzはイザヤ書38章にある二つの「しるし」（7-8節と22節）と列王記下20:1-11にあるひとつの「しるし」（9-11節）から、イザヤ書の方が古いテキストであり、列王記がイザヤ書にあるひとつの「しるし」を拡張し、それをもうひとつの「しるし」と合成し、ひとつの「しるし」にまとめたと主張する。[27] 彼によれば、ヒゼキヤの歌（イザヤ書38:9-20）（列王記にはない）の内容は主による回復の約束への感謝と約束が成就することの祈り（特に16節）である。[28] この場合、歌の後に、具体的なイザヤによる治療行為の描写と、歌を締めくくるヒゼキヤの誓い（20節）が成就することを示すしるしの要求（22節）が続くことは何ら

不自然なことではない。列王記では、イザヤがヒゼキヤに、回復し三日目に神殿に上れると約束し（20:5）、実際に治療が行われ、ヒゼキヤは回復する（20:7）。その後に、ヒゼキヤが三日目に主の神殿に上ることを示すしるしを求めている（20:8）。ここで何故ヒゼキヤが回復後にしるしを要求するのかが明らかではない。[29] 以上から、Seitz はイザヤ書 38 章の方が列王記下 20:1-11 よりも筋の通った（首尾一貫した）、古いテキストであると結論する。

## Ⅳ．列王記とイザヤ書、どちらが先か

正反対な二つの主張の根拠を簡単に（それもほんの一部分だけだが）紹介した。そこからイザヤ書 36-39 章と列王記下 18:13-20:19 との関係についてただちに結論を下すことはむずかしい。例えば、「ヒゼキヤ－イザヤ物語」の文体を検討する場合、その散文の部分に注目するのか、あるいは詩文の部分に注目するのかによって、列王記とイザヤ書のどちらに適合しているかの判断は異なる。どの部分に着目するかによって、結論が 180 度まったく異なるものとなるからである。

さらに、列王記下 18:14-16 の並行箇所がイザヤ書になく、反対にイザヤ書 38:9-20 の並行箇所が列王記にないことから、イザヤ書 36-39 章と列王記下 18:13-20:19 が提示するヒゼキヤ像はかなり異なったものとなっている。すなわち、イザヤ書の方が列王記より肯定的な（positive）描写、列王記の方がイザヤ書より否定的な（negative）描写になっている。これなども、まったく正反対の主張の根拠として使うことが可能である。列王記下 18:13-20:19 がイザヤ書 36-39 章より先だとすると、イザヤ書 36-39 章はヒゼキヤ像をより肯定的に、イザヤ書 36-39 章が先だとすると、列王記下 18:13-20:19 はヒゼキヤ像をより否定的に描こうとしているということになる。

また、ヒゼキヤの病気と回復の物語（列王記下 20:1-7 とイザヤ書 38 章）に関して、Seitz はイザヤ書の方が筋の通った、より古いテキストであると判断しているが、これは列王記の方が首尾一貫していない、イザヤ書よりも難しいテキストということを意味し、この場合、列王記の方がより古いと考えることも可能である。[30] 二つのテキストのどちらが先か、どちらが他方に依存しているかという問題を考える場合、単に二つのテキストを比較するだけでは不十分である。

さて、イザヤ書 36-39 章は列王記下 18:13-20:19 に依存しているという通説に対して、その依存関係はまったく正反対であるとの主張が出てきた背景には、イザヤ書を編集

上の統一体（a redactional unity）として理解する動きがある。[31] つまりイザヤ書全体を考察の対象とすることによって通説とは異なる考えが生まれてきたのである。具体的には、36-39章と他の箇所との関連が指摘され、このことがイザヤ書36-39章は列王記から取られたのではなく、イザヤ書の一部として作り出されたとの主張の最も重要な根拠となっている。

特に「ヒゼキヤ－イザヤ物語」であるイザヤ書36-39章と、いわば「アハズ－イザヤ物語」と呼べる7章の間には多くの類似点がある（すでに述べたように、Smelikは36-39章と7章が並行していることを強調する）。

（1）どちらも外敵が領土に侵入し、エルサレムへの脅威を指摘することで始まる（7:1、36:1-2）。
（2）アハズもヒゼキヤも外敵侵入の知らせを受け不安になる（7:2、37:1-4）。
（3）同じ場所が物語の一場面としてどちらにも出てくる（「布さらしの野に至る大通りに沿う、上貯水池からの水路の外れ」［7:3］と「布さらしの野に至る大通りに沿って上貯水池から来る水路の傍ら」［36:2］）。
（4）預言者イザヤはアハズにもヒゼキヤにも「恐れるな」という言葉を含む託宣を与える（7:4-9、37:6-7）。
（5）アハブには直接、ヒゼキヤには家臣たちを通して、イザヤからしるしが与えられる（7:10-16、37:30-32）。ヒゼキヤにはさらにしるしが与えられ（38:7）、彼自身もしるしを求める（38：22）。
（6）38:8で「アハズの日時計」が言及されている。
（7）どちらの物語も不吉な知らせで終わる（7:17、39:6-7）。[32]

明らかにアハズとヒゼキヤは対照的に描かれている。アハズは「わたしは求めない。主を試すようなことはしない」（7:12）と答え、主からのしるしを拒否するが、ヒゼキヤは自らしるしを求めている（38：22）。それに、ヒゼキヤは神殿に行き（37：1）、イザヤに人を遣わし（37：2）、再び神殿に上り（37：14）、主に祈り（38：３）、主への感謝と賛美を歌っている（38：10-20）。アハズと対照させることによって主を信頼するヒゼキヤが強調されている。36-39章と7章の密接な関係から、36-39章がイザヤ書のために作り出されたと仮定することは不可能ではない。さらに、すでにSmelikの主張の根拠のひとつとして紹介したように、36-39章の内容を時間の経過の点から見ると、38、39、36-37章の順序が適当のように思われる。したがって、40章以下の背景となっているバビロン捕囚を予告する39章が現在の位置にあることは、36-39章の中のテキストの配列は40

章以下を考慮してなされたものだと考えることが可能である。

しかし、こうした主張は決定的なものではない。R.E.Clementsによれば、イザヤ書39:6-7は紀元前598/597年にユダの王ヨヤキンと他の者たちがバビロンに連れて行かれた最初のバビロン捕囚に言及しているが、40章で前提とされている、紀元前587年のエルサレムと神殿の破壊と、それに続く捕囚を指し示していない。[33] つまり、36-39章は40章以下を念頭に作られたものではないということである。さらに、Sweeneyは36-39章と6:1-9:6（7章だけでなく）との密接な関連性について、後者が前者との関係で組み立てられた主張する。6:1-9:6は36-39章と関連（並行）するように現在の形にまとめられたというのである。[34]

一方、列王記下18:13-20:19もそのコンテキストと無関係なわけではない。ラブ・シャケの言葉の一部（18:22）は18:4と直接関連し、20:17-18のイザヤの言葉は24:8-17にあるユダの王ヨヤキンの捕囚を予告している。ヒゼキヤの記述を紀元前598/597年のバビロン捕囚についての予告で締めくくろうとする意図から、現在の配列になったとも考えられる。したがって、現在の配列から、「ヒゼキヤ－イザヤ物語」が本来イザヤ書の一部として作られたと結論を下すことはできない。

それでは、イザヤ書36-39章と列王記下18:13-20:19の関係をどのように考えるべきなのだろうか。ここで我々は「ヒゼキヤ－イザヤ物語」が三つの部分（イザヤ書の場合は36-37、38、39章）から構成されていることに注目したい。すでに述べたように、三つの部分は内容上関連しているが、形態上でも結びついている。38章はその冒頭の בַּיָּמִים הָהֵם（「そのころ」）（イザヤ書38:1// 列王記下20:1）によって36-37章に、39章はその冒頭の בָּעֵת הַהִיא // בָּעֵת הַהִוא（「そのころ」）（イザヤ書39:1// 列王記下20:12）によって38章に結びついている。C.F.Burneyは特に後者を申命記史家が異なる資料に記された出来事を結び合わせる際に用いた表現であるとする。[35] この主張に基づくなら、「ヒゼキヤ－イザヤ物語」は申命記史家が別々の物語をまとめあげたものと少なくとも仮定できる。D.M.Carrはその他にも申命記史家的特徴として、אֱלֹהִים חָי（「生ける神」）（列王記下19:16//イザヤ書37:17）、מַעֲשֵׂה יְדֵי־אָדָם עֵץ וָאֶבֶן（「木や石であって、人間が手で造ったもの」）（列王記下19:18//イザヤ書37:19）、לְמַעַן דָּוִד עַבְדִּי（「わが僕ダビデのために」）（列王記下19:34//イザヤ書37:35）、הִתְהַלַּכְתִּי לְפָנֶיךָ בֶּאֱמֶת וּבְלֵבָב שָׁלֵם（「わたしがまことを尽くし、ひたむきな心をもって御前をお歩み」）（列王記下20:3//イザヤ書38:3）、（「御目にかなう善いことを行ってきた（こと）」）（列王記下20:3//イザヤ書

38:3)、הֵסִיר חִזְקִיָּהוּ אֶת־בָּמֹתָיו（「ヒゼキヤは…その（主の聖なる）高台…を取り除いた」）（列王記下18:22//イザヤ書36:7）を挙げている。[36] ただし、「ヒゼキヤ－イザヤ物語」全体にわたって申命記史家の特徴が十分に見られないことから、「ヒゼキヤ－イザヤ物語」は既存の資料が申命記史家によって編集され、列王記の一部として使われたと考えられるだろう。[37]

## Ⅴ．おわりに

この小論では、イザヤ書36-39章と列王記下18:13-20:19との関係についてのもうひとつの主張、すなわち、イザヤ書と列王記がどちらも共通の資料に基づいているという考えとその根拠を紹介しなかった。それは、「ヒゼキヤ－イザヤ物語」に見られる申命記史家的特徴から、イザヤ書36-39章は列王記下18:13-20:19に依存していると判断したからである。[38]

最後に、列王記18:13-20:19に用いられた資料についてふれて、この小論を終わりたい。H.G.M.Williamsonは「ヒゼキヤ－イザヤ物語」に顕著なイザヤ的特徴を認め、それはイザヤの伝承を管理していた集団のものであったと主張する。[39] 物語の中のイザヤの役割から、イザヤに関係した集団が伝えた物語であったと推論することは可能である。この場合、イザヤ書の編集者はこの集団の伝承を直接参考にすることができなかったのであろうか。Williamsonの主張が正しいとするなら、イザヤ書36-39章と列王記下18:13-20:19との関係は、ただ単に列王記からイザヤ書に写されたというのではなく、もっと複雑な成立過程が存在していたのかもしれない。しかし、現在のヘブライ語聖書学ではこうした状況を明らかにすることはできない。テキストの成立史を解明することの難しさは、ヘブライ語聖書以外に資料がほとんどないことに原因がある。少ないデータからテキストの複雑な成立過程をたどることは不可能であり、つねに単純化されたモデルしか提出できないことを私たちは忘れるべきではない。

注

1　『聖書　新共同訳』、日本聖書協会、1987年では36-37章に「センナケリブの攻撃」、38章に「ヒゼキヤの病気」、39章に「バビロンからの見舞客」という小見出しが付いている。この小論での聖書の日本語訳には『聖書　新共同訳』を使用する。

2　John Barton, *Isaiah 1-39*, Old Testament Guides (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1995), pp.17, 95.

3 O.カイザー（並木浩一訳）『ATD 旧約聖書註解(18) イザヤ書13-39章 私訳と註解』、ATD・NTD 聖書 註解刊行会、1981年、610頁。引用に際して、章節の表記の仕方を変えてある。彼の主張の根拠については後で取り上げる。

4 木田献一、関根清三「イザヤ書」、『新共同訳 旧約聖書注解 II』、日本基督教団出版局、1994年、323頁。関根清三氏は「イザヤ書の編集者が列王記から引く際に改変したか、共通の伝承をそれぞれ、あるいは一方が、改変して用いたか、説は分かれる」と述べている（『＜旧約聖書 VII＞イザヤ書』、岩波書店、1997年、148頁）。ここで関根氏はイザヤ書から列王記へという説にふれていない。

5 Willem A.M.Beuken, *Isaiah Part II Volume 2: Isaiah Chapters 28-39,* Historical Commentary on the Old Testament (Leuven: Peeters, 2000), p. 335.

6 フランシスコ会聖書研究所訳注『聖書　原文校訂による口語訳　イザヤ書』、サンパウロ、2000年、289頁。

7 David M. Carr, “What Can We Say about the Tradition History of Isaiah? A Response to Christopher Seitz’s *Zion’s Final Destiny,*” *SBL 1992 Seminar Papers,* p.585. F.H.W.Gesenius の注解書（*Philologisch-kritischer und historischer Commentar über den Jesaia* [Leipzig: F.C.W.Vogel, 1821]）に直接当たることができなかったため、彼の主張に関する説明は Carr の論文に基づく。

8 Gesenius, *Jesaia,* pp.22, 934-935. エレミヤ書 52 章と列王記下 24:18-25:30 はほぼ同じテキストである。ゲダルヤの暗殺を物語る列王記下 25:22-26 はエレミヤ書 52 章にないが、ゲダルヤの暗殺に関する詳細な描写がエレミヤ書 40:13-41:18 にある。また、エレミヤ書 52:28-30 は列王記にない。

9 Gesenius, *Jesaia,* pp.932-934. 代表的な省略箇所は列王記下18:14-16（Gesenius, *Jesaia,* pp.937-938,939, n.2）。

10 Gesenius, *Jesaia,* p.934. ここでの神学的内容とは列王記の中心的な主題のひとつである預言者達の影響力と彼らの奇跡のことである。

11 Bernhard Stade, “Miscellen. Anmerkungen zu 2 Kö. 15-21,” *ZAW* 6 (1886): 172,180-182;Carr,“What Can We Say,”p.586. センナケリブの角柱はニネベから出土し、紀元前 691 年のものである。Stade は列王記下 18:13, 17-19:39 をさらに 18:13, 17-19:9a（B1 資料）と 19:9b-37（B2 資料）（19:21-31 は B2 資料への後代の付加）に分けた。この区分は続く研究に大きな影響を与えてきた。Brevard S.Childs は B1 資料を 18:17-19:9a, 36-37、B2 資料を 19:9b-35 とする（*Isaiah and the Assyrian Crisis*, SBT Second Series 3 [London: SCM Press, 1967], pp.73-76）。

12 Carr, “What Can We Say,” p.586.

13 Carr, “What Can We Say,” p.586.「18・13-16 は公式の記録から取られた簡潔な記述であるが、このような記述を不適当と考えた編集者が 18・17-19・37 を加えて、出来事の正しい見方を教えようとしたのだ」という主張がある（木田献一・雨宮慧「列王記下」『新共同訳　旧約聖書注解Ⅰ』、日本基督教団出版局、1996 年、657 頁）。

14 Beuken, *Isaiah II/2,* p.335, n.4.

15 Hugh G.M.Williamson, *The Book Called Isaiah: Deutero-Isaiah’s Role in Composition and Redaction* (Oxford: Oxford University Press, 1994), p.190 にも Smelik の主張が要約されている。

16 K.A.D.Smelik, “Distortion of Old Testament Prophecy: The Purpose of Isaiah xxxvi and xxxvii,” *Crises and*

*Perspectives: Studies in Ancient Near Eastern Polytheism, Biblical Theology, Palestinian Archaeology and Intertestamental Literature,* OTS XXIV (Leiden: E.J.Brill, 1986), pp.71-72. この論文は後に内容が拡張され、Klaas A.D.Smelik, *Converting the Past: Studies in Ancient Israelite and Moabite Historiography,* OTS XXVIII (Leiden: E.J.Brill, 1992) に ”IV. King Hezekiah Advocates True Prophecy: Remarks on Isaiah xxxvi and xxxvii // II Kings xviii and xix” という題で収められている（pp.93-128）。

17 Smelik, “Distortion,” p.72.イザヤ書の方でもヒゼキヤの回復後に「しるし」が求められているが（38:21-22）、Smelik はこの箇所を列王記下 20:7-8 に基づく後代の付加と見なしている。さらに彼は列王記におけるヒゼキヤの病気の箇所は最初 20:1-7だけであり、8-11 節は後になってイザヤ書を参考に付け加えられたと仮定する（p.88, n.20）。これはかなり無理のある主張に思われる。

18 Smelik, “Distortion,” p.88, n.20. Smelik によれば、列王記下 18:14-16は多分、神殿の宝物に関心を持っていた列王記の編集者が古い記録から取ってきたものである。

19 Smelik, “Distortion,” p.72.

20 Smelik, “Distortion,” p.72.

21 Smelik, “Distortion,” p.73. イザヤ書 7 章に並行する箇所は列王記にないが、導入部であるイザヤ書 7:1 は列王記下16:5 と非常によく似ている。Smelikはイザヤ書 7:1 と、列王記下18:13（あるいはもっと古い資料）からの引用であるイザヤ書 36:1を歴史的な情報を含んだ他の資料を指し示すための相互参照用の機能を持っていると考える。その資料とは『ユダの王の歴代誌』あるいは列王記であったかもしれない。列王記だとすると、イザヤ書のためにイザヤ書 7 章と 36-39 章が作られた時、現在のものとは違う列王記がすでに存在していたことになる（Smelik, “Distortion,” p.73）。

22 Smelik, “Distortion,” pp.73-74.

23 Christopher R.Seitz, *Zion’s Final Destiny: The Development of the Book of Isaiah: A Reassessment of Isaiah 36-39* (Minneapolis: Fortress Press, 1991). ただしSeitz はイザヤ書 39 章にあるバビロンからの使者たちのエルサレム来訪の物語が申命記史書の論理と構造に関係していることから、36-38 章とは異なり、本来は列王記の一部として作られたと考える（Seitz, *Zion’s Final Destiny,* pp.159, 182-191; Carr, “What Can I Say,” p.590）。

24 Seitz, *Zion’s Final Destiny,* pp.54-55 ;Carr,“What Can We Say,” p.586. 14-16節ではヒゼキヤを חִזְקִיָּה 、17 節以降では חִזְקִיָּהוּ と表現している。ただし13 節にも חִזְקִיָּה が使われている（18:1,10も）。この場合、13-16 節がひとつのまとまりをなすことになる。13-16 節が後代の挿入とすると、17 節以下への導入部がなくなってしまう。ただし、わずかな写本では13 節に חִזְקִיָּהוּ が使われている。この読み方を取り入れるならば、14-16 節がひとつのまとまりとみなされる。Seitz, *Zion’s Final Destiny,* pp.52,54 参照。加えて、מֶלֶךְ יְהוּדָה（ユダの王）という表現も列王記下18-19章では18:1, 14, 16; 19:10 にしか出てこない。Seitz, *Zion’s Final Destiny,* p.56 参照。

25 Seitz, *Zion’s Final Destiny,* pp.56-59 ;Carr, “What Can We Say,” pp.586-587. 列王記下 18:14-16 の史的信頼性に関しては、Seitz, *Zion’s Final Destiny,* pp.61-66 参照。

26 Seitz, *Zion’s Final Destiny,* pp.59-60 ;Carr, “What Can We Say,” p.587. Seitz は、Stade が18:13, 17-19:37 を

B1 資料（18:13, 17-19:9a）と B2 資料（19:9b-37）（19:21-31 は B2 資料への後代の付加）に区分したことについて、それは18:17-19:37 の中にある繰り返しについての根本的な誤解から来るもので、繰り返しが異なる資料の存在を指し示すものではなく、いかにヒゼキヤが神を信頼していたかを描写しているのである、と主張する（Seitz, *Zion's Final Destiny,* pp.68-72; Carr, "What Can We Say," p.587）。Seitz は、繰り返しが物語全体の構造を提供する文学的装置であるという Smelik の考えを紹介している（p.70）。Smelik, "Distortion," pp.76-78 も参照。

27 Seitz, *Zion's Final Destiny,* pp.162-176; Carr, "What Can I Say," p.588.

28 Seitz, *Zion's Final Destiny,* pp.170-171; Carr, "What Can I Say," p.589. ヒゼキヤの歌の表題には「病気であったが、その病気が治って命を得た」（38:9）とあるが、Seitz はこの歌を病気が治ってからのものとは考えない。

29 Seitz, *Zion's Final Destiny,* p.164; Carr, "What Can I Say," pp.588-589.

30 Carr, "What Can I Say," pp.588-589. Seitz は列王記下 20:1-11 ではイザヤ書38章にある本来別々のしるし（回復に関するしるしと神殿に上れることを示すしるし）がひとつになっていると主張するが、Marvin A.Sweeney はヒゼキヤの病気は皮膚病であると考えられるので、病気の回復と神殿へ上がれることのしるしは関係していると反論する（*Isaiah 1-39 with an Introduction to Prophetic Literature,* FOTL XVI [Grand Rapids: W.B.Eerdmans, 1996], p.499）。レビ記 13:18-23, 14:32 参照。

31 越後屋朗「イザヤ書研究の現在」『基督教研究』、第 55 巻第 1 号（1993 年 12 月）、24-25 頁参照。

32 越後屋朗「イザヤ書　1-39 章」『新共同訳旧約聖書略解』、日本基督教団出版局、2001年、769 頁。Edgar W.Conrad, *Reading Isaiah,* Ovetures to Biblical Theology 27 (Minneapolis: Fortress Press, 1991) pp.36-40; Sweeney, *Isaiah 1-39,* p.479 ; Williamson, *The Book Called Isaiah,* pp.191-192 も参照。Peter Acroyd は 6:1-9:6 と 36-39 章との類似点を挙げている（"Isaiah 36-39: Structure and Function," *Studies in the religious tradition of the Old Testament* [London : SCM Press, 1987], pp.116-119）。彼は、「万軍の主の熱意がこれを成し遂げる（成就される）」（ קִנְאַת יְהוָה צְבָאוֹת תַּעֲשֶׂה־זֹּאת ）という表現が 9:6 と 37:32 だけに出てくることを指摘する。

33 Ronald Clements, *Isaiah and Deliverance of Jerusalem,* JSOTSup 13 (Sheffield: JSOT Press, 1980), pp.63-71.

34 Sweeney, *Isaiah 1-39,* p.480.

35 C.F.Burney, *Notes on the Hebrew Text of the Books of Kings* (Oxford: Clarendon, 1903), pp.187, 339; Carr, "What Can I Say," p.594.

36 Carr, "What Can I Say," p.594.

37 Carr, "What Can I Say," pp.594-596; Williamson, *The Book Called Isaiah,* p.211.

38 Carr, "What Can I Say," pp.595-596 も参照。Sweeney によれば、イザヤ書 36-39 章は、ヒゼキヤを理想化し、模範的な信仰者としてのヒゼキヤに対するヤハウエの迅速な応答を強調する方向で、列王記下 18:13-20:19 を変更している（*Isaiah 1-39,* pp.456-457, 476-485, 496-502, 508-510）。

39 Williamson, *The Book Called Isaiah,* pp.209-211. 彼は「ヒゼキヤ－イザヤ物語」の中にイザヤ的特徴を見るものの、最初に列王記に取り入れられたと考える。